

令和元年度第7回 感染症発生動向調査部会

令和元年10月16日

月番：大西秀典

1 前月の感染症発生動向について（2019年第36週～第39週・9月）

<全数把握対象疾患>

- ・ 一類感染症については、発生報告は無い。
- ・ 二類感染症については、結核は、発症患者および潜在性結核感染症のいずれも前年同期までの累計と比較し増加している。高齢者で発生頻度が多いが、20-29歳にもピークがあり、若年者での発症が目立ってきている。
- ・ 三類感染症については、腸管出血性大腸菌感染症が毎週報告されており、今年度は対前年比で増加している。菌株としては0157が1件、その他(全て0145)が8件報告されている。
- ・ 四類感染症については、A型肝炎が1件、デング熱が3件、レジオネラが7件報告されており、特にレジオネラについて今年度は対前年比で増加している。
- ・ 五類感染症については、百日咳が13件報告されており、対前年比で増加している。
- ・ その他の五類感染症では、アメーバ赤痢、カルバペネム耐性腸内細菌科感染症、劇症型溶血性レンサ球菌感染症、侵襲性インフルエンザ菌感染症、侵襲性髄膜炎菌感染症、侵襲性肺炎球菌感染症、ジアルジア症の散発例が報告されている。

<定点把握対象疾患>

- ・ インフルエンザの発生が少ないながらも全ての定点でみられている。
- ・ RSウイルスの流行期にはいり、定点あたりの発生数8.6、前月比231.9%と発生数が急増している。
- ・ 咽頭結膜熱は定点あたりの発生数1.3、前月比106.0%と発生が継続している。
- ・ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は発生数2.8、前月比111.7%と発生が継続しているが、全国平均よりは発生頻度は低い。
- ・ 感染性胃腸炎は発生数6.7と患者報告数が多いが、前月比83.3%、前年同期比80.3%で発生数は減少している。
- ・ 手足口病(定点あたり発生数5.8、前月比36.8%)、ヘルパンギーナ(定点あたり発生数1.6、前月比41.5%)であり急激に流行が収束しつつある。
- ・ 伝染性紅斑が全国的に流行しており、岐阜県内でも定点あたり発生数2.5、前月比107.5%となっており、2017年、2018年と比較して発生数が多い状況が続いている(前年同期比は935.7%)。
- ・ 流行性角結膜炎が定点あたり発生数2.0、前月比152.8%と増加傾向である。
- ・ マイコプラズマ肺炎の発生数が定点あたり発生数2.6、前月比203.1%と増加傾向である。前年同期比260.0%であり、全国平均と比較しても発生数が多い。

2 検討すべき課題

- ・百日咳について
 - ・ワクチン4回接種者でも学童期以降の罹患が多い。引き続き注意喚起が必要。
- ・RSウイルスについて
 - ・保険診療上は、非入院症例について1歳未満しか迅速検査は適応ではない。一方で1歳以上の幼児期でも罹患患者は多いと推測される。どのように対応していくべきか。

3 情報提供すべき事項

特になし

4 情報提供（月番委員専門分野から）

- ・岐阜県こどもの健康を考えるつどい 毎年10月開催
2019年は、10月31日に岐阜市文化センター小劇場にて開催されます。

<検討結果>